

第1回ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP)
制度評価(中間)検討会 議事録

1. 日時 平成23年12月20日(火) 10:00~12:00
2. 場所 経済産業省 別館6階626会議室
3. 出席者

(検討会委員) [敬称略・五十音順、※は座長]

※伊関	洋	東京女子医科大学先端生命医科学研究所	教授
上田	太郎	独立行政法人産業技術総合研究所 バイオメディシナル情報研究センター 副研究センター長	
貝原	麻美	独立行政法人理化学研究所	研究戦略会議 研究政策企画員
手柴	貞夫	協和発酵キリン株式会社	社友 中央大学理工学部生命科学科 兼任講師
林	隆之	独立行政法人大学評価・学位授与機構	評価研究部 准教授

(事務局)

経済産業省産業技術環境局国際室

室長	上田 洋二
課長補佐	保坂 明
企画調整係長	渡邊 友美

(評価推進課)

産業技術環境局産業技術政策課技術評価室

課長補佐	杉村 哲雄
技術評価専門職	玉野上 佳明

(調査実施機関)

(株)三菱化学テクノロジーサーチ調査コンサルティング部門

主幹研究員	良峰 景子
首席研究員	田川 徹
客員研究員	早崎 胖

(オブザーバー)

文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官付

研究交流官 佐々木 秀樹

交流第2係 青山 直樹

4. 配布資料

資料1 ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP) 制度中間評価検

討会委員名簿

- 資料 2 研究開発評価に係る委員会等の公開について
 - 資料 3 経済産業省における研究開発評価について
 - 資料 4 評価方法（案）
 - 資料 5 ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム（HFSP）制度の概要
 - 資料 6 評価用資料
 - 資料 7 本研究開発制度に係る調査結果
 - 資料 8 評価報告書の構成（案）
 - 資料 9 評価コメント票
- 質問票
- 参考資料 1 経済産業省技術評価指針
 - 参考資料 2 経済産業省技術評価指針に基づく標準的評価項目・評価基準
 - 参考資料 3 ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム（HFSP）制度中間評価報告書（平成 21 年 4 月 産業構造審議会産業技術分科会評価小委員会）

5. 議事

(1) 開会

<開会>

事務局から、出席委員・事務局・オブザーバーの紹介が行われた。

委員の互選によって、伊関 洋 委員が本検討会の座長に選出された。

(2) 評価検討会の公開について

事務局から、資料 2 により、評価検討会の公開について説明がなされた後、本評価検討会について、配付資料、議事録及び議事要旨を公開とすることが了承された。

(3) 評価の在り方と評価の手順等について

評価推進課から資料 3、事務局から資料 4、8、9 により、評価の方法等について説明がなされた。委員から制度評価の視点につき質問があり、事務局より経済産業省の産業振興・基礎研究開発促進の視点から評価してほしい旨回答し、了承された。

(4) 研究開発制度の概要と評価用資料について

事務局から、資料 5、6、7 により、HFSP 制度の概要について説明がなされた後、以下の質疑応答が行われた。

【手柴委員】：HFSP の魅力という視点からみて、たとえば研究グラントの支援金額の魅力は他制度と比較してどの程度なのか。

【事務局】：資料 5（P3）記載の通り、研究グラントの場合、3 年間、チーム当たり年 25～45 万 \$。参加研究者の多いチームでは、一人当たり金額は少なくなる場合も出てくる。

【伊関座長】：産総研や理研はどのくらいか。

【上田委員】：産総研の場合、経常的に配分される研究費は 50 万円程度と不十分な額である

【貝原委員】：理研の場合は、プロジェクトにより大きな幅があるが、科研費の 300～1,000 万円程度。競争的資金では、一般的な国際レベルであると思える。

【伊関座長】：金額的には同レベル、ただし英語で対応せねばならない、採択率が低い等々から、魅力が薄くなっているのであろうか。

【貝原委員】：研究者にはアワードとして評価は高い。

【林委員】：前回の中間評価でも出されたが、日本人の応募件数は増加しているのか。

【事務局】：研究グラントの場合 2011 年 150 名、2010 年 150 名、2009 年 126 名、2008 年 202 名であった。2011 年の全応募件数は 674 件で、拠出金の割合に比して応募件数の比率は確かに低い。長期フェローシップ応募数は、49、47、56、60 件である。

【伊関座長】：前回の中間評価でも出た意見であるが、英文サポートは如何になっているか。

【事務局】：文部科学省の方で、広報も含めて検討されている。英文サポートは、受賞経験をされた研究者に支援して頂くことを考えている。

【林委員】：制度評価の進め方の問題であるが、前回の評価事項に対する経済産業省としての対処方針が出され、それに基づき制度運営の改善が行われていることを示さないと、制度評価の意義が無くなってしまう。評価報告書のフォーマットに、かかる事項を記載する場所を設けた方が良いのではないか。

【事務局】：従来は「概要」の項に記載している場合があるが、今回は抜けている。評価報告書フォーマットを変更することは難しいが何等かの対応を考えたい。

【上田委員】：行政刷新会議「仕分け」の論点は、何であったのか

【事務局】：意見として多かったのは、立ち上がり時期の「国際貢献」は既に終わった。現在の国際貢献にはより効率的な資金の使い方があるのではないか。日本研究者に対しては、例えば国内で選別してファンドしたほうがより効率的ではないか、等であったと思う。

【上田委員】：しかし根本の国際貢献を否定されては問題である。

【事務局】：仕分けでは、国際貢献の効果の有無については、特段の議論は無かった。

【事務局】：本事業は文部科学省・経済産業省で計上され、国際貢献を共通目的としているが、文部科学省では基礎研究の推進が認められている。一方経済産業省は産業化・市場化との観点があることから、経済産業省の事業が仕分け対象にされたと思われる。

【事務局】：日本の研究者支援の観点では、海外との研究者、他分野の研究者との交流は、研究者の育成には極めて有効と考えている。

【上田委員】：それについては、2 国間共同研究者に直接出したら良いとの意見もあるようだ。

【貝原委員】：事業化が見えないならシーズの支援はいらないと考えているか。

【事務局】：経済産業省はシーズも重要だと思っている。シーズをさらに次につなげていくことが重要であると考えている。

【手柴委員】：文部科学省一本にするとういうような議論は、経済産業省の中で議論されてい

るのか。

【事務局】：産業技術の研究開発としての費用対効果の面を含めると、今の HFSP への資金拠出という形が良いのか、種々の意見はある。そのため、この制度が経済産業省として重要であるとの説明を明確にできないと、財源不足の状況で予算計上が難しくなる。経済産業省としての今後の課題である。

【手柴委員】：経済産業省自身が、基礎研究の重要性に理解を持つことは賛成である。良いシーズが無ければ事業化に繋がらない。

【伊関座長】：財源不足の時代に、経済産業省として基礎研究を何処まで維持できるかの課題もある。

【事務局】：目標設定が明確に出来ないと、「仕分け」の 20%削減は呑まなければならない。制度の重要性には異論は無い。しかし今後の経済産業省としての関与の可能性を詰める必要がある。

【手柴委員】：日本の場合、外国人研究者との共同研究が極めて少なく、孤立化の傾向にある。その点からも本制度は、良い制度である。

【事務局】：企業を含めて、日本の研究者は内向き、孤立化の傾向にある。欧米では国際化、国際協力は当然である。その意味からも本制度は意義がある。

【伊関座長】：国際化、国際協力の観点からは、重要な制度である。

【事務局】：国としての政策の是非ではなく、今回の評価は経済産業省としての政策の是非と考えている。

【林委員】：本事業は、経済産業省の上位政策と整合性が取れているとは言い難い。経済産業省として関与の仕方・方法を考えねばならない。例えば、国際的な「マネージメント方法の習得」により、国際的な交流面で主導的な位置を占めると言う考え方もあろう。この機会に、経済産業省としての考え方を整理する必要があるだろう。

【伊関座長】：経済産業省として何等かの見直しは必要であろう。

【事務局】：今までの費用対効果をきちんと検証する必要がある。今回の評価を受けて、経済産業省としてどうすべきかを別途対応する。

(5) 今後の評価の進め方について

事務局から、「資料9 評価コメント票（評点シート含む）」について説明があり、評価コメント票の提出期限を平成 21 年 1 月 11 日とすることを確認した。

また、次回の第 2 回評価検討会を平成 21 年 1 月に開催することとした。

(6) 閉会

以上